

親鸞教學に於ける證果論

光 地 英 學

一、親鸞證果論の特色と其の來由

親鸞の證果思想は、その理想が彌陀の眞實信仰者の、彼土初生速極證大涅槃に在ると共に、一分の證を現生に認容するとの彼此、即ち現當二益思想たる所に、その特色が在るのである。

先づ此土の證に就いて、聖人は一念多念證文に、無量壽經の必至滅度の願たる第十一願文を和述して「タトヒワレ佛ヲエタランニ、クニノウチノ人天、定聚ニモ住シテカナラズ滅度ニイタラズバ佛ニナラジ」とて、普通「定聚ニ住シテ」と訓むべきをば、「ニモ」と訓んで、往生後のみを顯はす可き意味をば、往生前の得益の意味へと轉

ぜんとし、又、同「證文」に、第十一願成就文に就いて「ソレ衆生アテ、カノクニニムマレントスルモノハ、ミナコトコトク正定ノ聚ニ住ス」と訓み、往生論註の「經言、若人但聞彼國土清淨安樂、尅念願生亦得往生即入正定聚」の文を擧げ、その「尅念願生亦得往生」をば「尅念シテムマレムトネガフヒト、マタスデニ往生ヲエタルヒトモ」と訓んでゐる。論註の斯る訓み方の例は、尙淨土三經往生文類及び「教行信證」證卷等にも之を見得る。即ち以上の聖人の訓み方に依れば、彼土と此土の何れに於ても正定聚に住する如く解される、而してこの二つの正定聚中、親鸞に在つては、此土のそれが眞意に合する所で、彼土の住正定聚は、單に従果降因の還相の示

現相を執れる菩薩身に他ならないのである。故に聖人は、證卷頭に於て明瞭にその眞義を表明してゐる。即ち「然煩惱成就凡夫、生死罪濁群萌、獲往相廻向心行即時入大乘正定聚之數」と。尙往生文類頭には「現生正定聚ノクラキニ住シテ、カナラズ眞實報土ニイタル」とあり、又末燈鈔には「淨土へ往生スルマデハ、不退ノクラキニテオハシマシサウラヘバ、正定聚ノクヲキトナツケテオハシマスコトニテサフラフナリ」とある。⁽⁴⁾

以上、現身にて正定聚不退位に住するとの、此土一分の證果たる現生得證の檢證を窺ひ得たと思ふ。次に聖人の眞の證果たる彼土の得證、即ち往生即成佛思想の闡明されてゐる例證を需むれば、信卷に「大願清淨報土、不云品位階次、一念須臾頃速疾超證無上正眞道」⁽⁵⁾と、同卷に「念佛衆生、窺横超金剛心故、臨終一念之夕、超證大般涅槃」⁽⁶⁾とある。是等に據つて、彼土の證たる往生即成佛思想が知らる、次第であるが、かゝる例文は、聖人の

著書中に尙數多く見出し得る所である。

然らば、次に斯る思想は、何に依據せるかを探究するの要があるであらう。普通第十一願の各譯が、國中人天・國中有情、或は我國中人天とあつて、明かに彼土の相を示してゐるが、その成就文に在つては必ずしもそれと軌を一にしてはゐない。即ち唐譯「無量壽如來會」には、「彼國衆生、若當生者、皆悉究竟無上菩提到涅槃處、何以故若邪定聚及不定聚、不能了知建立彼因故」⁽⁷⁾とある。

即ち此の「若當生者」は此土の行者を意味し、斯願文は親鸞の此土入不退説の證左であり、したがつて聖人の證卷及び往生文類に引用してゐる所でもある。尙大經第卅三願の「超過人天」とは、生死に流轉せざる正定聚不退の事であり、第卅四願の「菩薩無生法忍」とは、通大乘に於ける地上の菩薩たる七・八地所得の法なるが故に、正定聚不退位でもある譯である。且當二願の住不退位は、何れも彌陀の淨土ならざる他方國土の衆生を指してゐる

が故に、親鸞の現生正定聚の思想に合致する所のもの
なくてはならない。之れ即ち、聖人の此の二願文並に如
來會の同願文をば、信卷に引用してゐる、その理由の據
つて存する所である。又觀無量壽經に「見彼國土極妙樂
事、心歡喜故、應時即得無生法忍」⁽¹¹⁾とあつて、これは第
十八願成就に於ける信心歡喜の一念の「即得往生住不退
轉」に通ずる事となる。此の章提の第七華座觀の義理を
行卷の正信念佛偈にも「慶喜一念相應後、與章提等獲三
忍」⁽¹²⁾と。又、易行品第九の阿彌陀佛を讚歎する所に「人
能念是佛 無量力功德 即時入必定 是故我常念」⁽¹³⁾とあ
るのは、現生不退説を表はす所のものであるが、聖人は
之れを繼承し、行卷・愚禿鈔・尊號眞像銘文等に於て、
這般の思想を表明してゐる。尙この他聖人には引用なき
も、斯る思想を内含せる幾多の文字が探り得られる。即
ち宋譯「大乘無量壽莊嚴經」の第十一願成就文や、幾分
異例ながら、荻原雲來博士の梵和對譯無量壽經、同河口

慧海教授の藏和對譯⁽¹⁹⁾、及び同マックス・ミュラーの英譯
の同願文等、又大經終りの「佛告彌勒、於此世界有六十
七億不退菩薩、往生彼國」⁽²⁰⁾の文、並びに阿彌陀經の「若
有人已發願、今發願、當發願、欲生阿彌陀佛國者、是諸
人等、皆得不退轉於阿耨多羅三藐三菩提」⁽²¹⁾の文、且は觀
經の「一一光明、徧照十方世界、念佛衆生、攝取不捨」⁽²²⁾
の文等々は、その例證とさる可きものである。以上を以
て娑婆世界中の信心發起者の現生不退の意を窺知し得た
であろうと共に、聖人もおそらく是等の中の漢譯經典を
判讀せしことであらうとは、推測するに難くない。

親鸞の、かゝる現生不退位の思想の内面的因由は、絶
對他力の信仰よりの招來である。即ち眞に徹底的に自力
を捨て、彌陀に託乘し、涅槃の全現せる彌陀覺悟の世界
たる淨土に往生せし以上は、自己を捨離し、以て彌陀に
全託せる限り、其處に尙凡夫性の幾分なりとも殘存して
ゐるとの事は、考へ得られざる事である。仍て淨土往生

即時に於て彌陀と同證同覺すると爲したのである。かく解するに至つた所以のものは、絶對他力の救済に據る淨土初生即時成佛に在るが、此の思想に對して、親鸞の著書中に引用文無きは、引用文が他に有つて爲さざりしにあらずして、則ち、無かつたが故に、之れを爲さなかつたのである。之れに反して、此土入不退思想に於ては、彼土往生即時成佛思想の文字に據らざる絶對他力の信念より來てゐるのは異り、この彼土往生即時成佛の信念に立脚しての文字に據つたが爲である。この故を以て、正定聚に關する引用文も多い譯である。

斯く彌陀の救済觀に對する顯益たる彼土往生即時成佛の主觀と、密益たる此土聞信即時住不退位なる客觀的證言に據る一因一果の法門は、遠くは支那聖道門流淨土教諸師、近くは同法然門下中、諸佛の所に於て歴史供養を要する九品寺長西寺の、傍系的淨土教諸流の往生後の成佛觀は勿論、親鸞に於ける正統的淨土教の流れたる七高

祖の中、五果漸證説の天親⁽²⁴⁾、淨土往生と成佛とは隔りありとする曇鸞・道綽⁽²⁵⁾⁽²⁶⁾、彼土に到つて小果を證し轉じて大に向ひ、往生は易く成佛は難しとする善導⁽²⁷⁾彼國に生じ始めに無生を悟り、次いで佛果菩提に到るに前後早晚あり、證果に遲速ありとする源信、淨土にて彌陀・觀音・勢至にあふて諸聖教を學し、開覺するに機にしたがつて遲速ありとする法然等⁽²⁹⁾の是等の階次成佛思想を根據としつゝ、尙、之れに進一步せる特色ある證果思想と云ふべきであらう。

この證果に關する對機に就いても、淨影・嘉祥等の聖道的淨土教諸家の九品の機相を立て、地下常没の凡夫の彼土往生を許さぬとは異り、曇鸞・道綽・善導・法然等の凡夫往生説を繼承し、五乘齊入中、特に本爲凡夫兼爲聖人より更に干頭進一步して、惡人正機説⁽³⁰⁾の樹立は、特に注意せらるべきである。

註(1) 大正八三卷 六九四頁下

- (2) 大正八三卷 六九四頁下
- (3) 下卷曇鸞造 精シクハ「無量壽經優婆提舍願生偈婆藪槃頭菩薩造並註」眞宗聖教大全中卷 六二頁
- (4) 大正八三卷 七一六頁中
- (5) 同 六〇六頁上——六〇七頁上
- (6) 同 六〇九頁中
- (7) 淨土宗全書一 一五五頁下
- (8) 大正八三卷 六一六頁中
- (9) 同 六七三頁上
- (10) 同 六〇八頁中
- (11) 大正十二卷 三四一頁下
- (12) 龍樹造 十住毘婆娑論第五
- (13) 眞宗聖典全書(漢文之部) 一三〇頁
- (14) 大正八三卷 五九七頁中 及ビ同卷正信偈龍樹讚偈
- (15) 大正八三卷 六五三頁中
- (16) 同 六八一頁中
- (17) 同經中卷 大正十二卷 三二三頁上
- (18) 淨土宗全書別卷一 九九頁
- (19) 同 二八五頁 同譯ニテハ、前ノ莊嚴經並ニ梵文ノ當生トアルトハ異リ、後ノ英文ト共ニ未生トナツテキル。
- (20) 大正十二卷 三六〇頁中

親鸞教學に於ける證果論

- (21) 同 三四八頁上
- (22) 同 三四三頁中 念佛ノ衆生ハ彌陀ノ光明ニ攝取セラル、ヲ以テ、再ビ流轉セナイ、コノ故ニ現生不退位ナル事ガ推察サレ得ル。
- (23) 淨土法門源流章 淨土宗全書十五 六〇〇頁上
- (24) 往生論 精シクハ「無量壽經優婆提舍願生偈」眞宗聖教大全中 三六頁
- (25) 往生論註 下卷 眞宗聖教大全中 六二頁
- (26) 安樂集上卷 眞宗聖教大全中 一一四頁 同下卷 同中 一二三頁・一二八頁
- (27) 觀經女義分卷第一 眞宗聖教大全中 一四八頁
- (28) 往生要集六 眞宗聖教大全中 四三三頁—四三四頁
- (29) 和語燈錄二 淨土宗全書九 五三頁上(取意)
- (30) 歎異鈔 大正八三卷 七二八頁下

二、他力廻向と證果

斯る萬機普益の證は、前述の如く決して自己の力に據つて獲たものではなく、此土の密益・彼土の顯益、何れに於ても彌陀如來より衆生に與へ給ふ所のものであり、

總ては如來に依りて義とせらる、他力廻向の賜である。故に證卷にも「夫案眞宗教行信證者、如來大悲廻向之利益、故若因若果、無有一事非阿彌陀如來清淨願心之所廻向成就⁽¹⁾」と叙べられてゐる事は、親鸞の特色ある思想信仰たる他力廻向に據る證果觀として特に一言するの要を感ずる。

顧るに、かの天親の淨土論⁽²⁾に於て、又それを繼承し註釋せる曇鸞の往生論註⁽³⁾に於て、廻向は菩薩道に於ける利他の相としてのそれにして、二利完成を意味するものであつた。したがつてそれは總て衆生より如來への方向を取り、その動力は自力であり、吾人衆生が主であつた。のみならず此の自己を中心とする所に、廣く一般廻向論としての姿態が觀ぜられる。然るに衆生が機情の行修を凡て否定し、虛假不實にして如來に廻向する何ものもなき絶對無力なる自己相に徹せし親鸞に在つては、此の雜毒無善の自我上に、如來の全力を體感せざるを得なかつ

たが故に、廻向上に於ける自力より他力への轉廻は、必然的なる歸結でなければならなかつた。而してこの親鸞の到達せる他力廻向の論理は、如上淨土門の先驅諸師、及び法然門下の諸流に於ける救濟の論理の棹尾を飾るものであり、この三願轉入の論理過程中の最終段階に位置するものと云ふべきである。

斯く救濟の因果動力の總てを如來よりものせし親鸞は、選擇集の不回向・回向對の字意に倣つて、不回向の宗教、不回向の證果を唱道樹立したのである。親鸞のこの他力不回向の様相は、先づ信卷・往生文類・文類中に見られる第十八願成就文の上に、又は愚禿鈔⁽⁹⁾に表れてゐる散善義の文等の、是等の訓み方の上に見られる。即ち普通「廻向スル」と訓む可きをば「廻向シ玉ヘル」「廻向セシム」又は「廻向セシメ玉ヘル」等と能動態を所動態へと改めてゐる處に、その廻向釋の眞義が察知し得られるのである。聖人は教卷頭に「謹按淨土眞宗、有二種廻

向、一者往相、二者還相」と叙べ、曇鸞の往還二廻向の文字に據り、而も名同實異とも云ふ可くそは謂ふ所の盛るに新酒を以てしたものである。斯る消息は尙證卷・文類・往相廻向還相廻向文類等にも數多く見出し得る所である。而して、この往相廻向とは他力に據る自利であり、還相廻向とは他力に據る利他である。

親鸞の彼此二益法門を、此土にては入正定聚位とこの不入退位後の様相の二に、彼土にては往生即時成佛と成佛後の様相の二に分け得られるが、前の三は實にその往相廻向に相當し、後の一即ち成佛後の様相は還相廻向に相應するのである。此の往相の三と還相の一と、之等の四問題、別の見方にては此土の密益としての二相と、彼土の顯益としての二相とに關し、この四綱目に就いて次に説明を試みることにする。

註(1) 大正八三卷 六一七頁上

(2) 眞宗聖教大全中卷 三六頁

親鸞教學に於ける證果論

(3) 同 五八頁

(4) 「選擇集」二行章第四 大正八三卷 三頁下

(5) 文類ニ選擇集ノ右ノ言葉出ヅ、大正八三卷 六四四頁

中

(6) 大正八三卷 六〇六頁上―六〇一頁中

(7) 同 六七二頁下

(8) 同 六四四頁中

(9) 下卷 大正八三卷 六五二頁中

(10) 同卷ノ最後、及ビ同卷引用往生論註ノ文中

(11) 大正八三頁 六四六頁中

(12) 一名「如來二種廻向文」大正八三卷 六七七下頁―

六七八頁―六七九頁上

三、密益としての此土の證果

先づ第一の入正定聚に就いて聖人は、第十八願成就文を指南とし、本願の生起本末を聞名信喜せる無疑決定の一念に於て、如來の慈悲が我に入り充ち給ふとする。此の信決定の一念も本願力廻向の信心にして、清淨報土眞因の一心であり、善惡・賢愚・凡聖逆謗齊しく此の信心の業識を内因とし、攝取不捨の光明・名號の父母を外縁

とし、六趣四生因亡果滅の大利を得、有漏の穢身は未盡なるも、密に正定聚位に住するのである。行卷には「良知、無德號慈父、能生因闕、無光明悲母、所生緣乖、能所因緣雖可和合、非信心業識、無到光明土、眞實信業識、斯則爲內因、光明名父母、斯則爲外緣、內外因緣和合、得證報土眞身⁽¹⁾」と述べてゐるが、這般の風光をよく表してゐると云ふべきである。二卷鈔⁽²⁾にては往生禮讚の意を轉用し、此の本願の信受は前念命終にして、前刹那に迷妄の命脈を盡くしたる入正定聚の數であり、後刹那に已に即得往生の益を得て不退轉人となるが故に後念即生にして即時入必定なりとしてゐる。故にこの位を亦必定菩薩とも名付ける。於茲、往生の現實的保證は同時に成佛の保證となり、往生不退はやがて成佛不退となるのである。已にこの現在の身體を失ふこと無くして成佛が豫約され、何時有漏の穢身を捨つるとも佛種を一念に成就せし以上は、佛果は超證さるゝが故に、第十九・廿願等の

諸行往生の體失往生とは異り、不體失往生と云ふ可きである。斯く信決定の時、即得往生であり、往生の業事が平生に於て治定し、尋常の時より攝護せらるゝ攝得往生⁽⁴⁾となるが故に、法然⁽⁵⁾・長樂寺隆寛等の如く臨終の正念に俟つ要もない。従つて、來迎を頼むの必要もなく、勿論三輩九品往生等も用不著である。親鸞の立場からは、之等は總て眞實ならざる假門の事として排されるのである。即ち一般淨土教諸家の有來迎說に對し、聖人に在つては不期來迎說・不頼來迎說⁽⁷⁾がその眞義である。

次に、第二の入正定聚後の様相に移る。聞信に依つて如來の他力廻向に全託せる以上は、吾人の上に榮えある宗教生活が營まれなくてはならない。自我的小行は願力託乘の上は一切その要なく、正行にあらざる五念門の行等の雜行や、又は現世祈禱や餘他の迷信行等は、凡て自力執心の雜修として排せられる。自ら利益を求めざるに凡ては如來よりの利益として與へられる。聖人は信卷⁽⁸⁾に

於て、金剛の信心を獲得する者の、横に五趣八難の道を超えて得る現生十種の利益を擧げてゐる。この十種の利益を生ずるに至りし典據は、別に、聖人の著述中に見出されざるも、淨土三部經及び七祖の聖教上に亘つて汎く需め得るのであり、したがつて聖人は實に是等に據つて、この十種利益をば組織つけたであらうことが推察され得るのである。その第一より第九迄は、その性質上入正定聚の利益内容であり、その分析的説明なる點、第十の入正定聚の益が總益たる位置を有するに對して、別益たるの位置を有する事となるのである。然し信心念佛者の現生利益は、かゝる有量的のものにあらざる事は勿論である。(9)而してこの利益を廻向されたる親鸞の宗教生活相如何とならば、かの善導の散善義・往生禮讚、又は法然の「和語燈」往生大要鈔等に散見する二種深信義の、地獄一定不成佛の機の深信と、必得作佛の法の深信との機法二種の深信を深く自ら體感味識し、反論理のその儘に

超論理なる難思の法界に融け込みし、機相・法徳の懺悔即ち感謝・歡喜・報恩のそれであると謂ふべきであらう。云ふまでもなく、有限と無限との二重性を一人格上に圓融してゐることは、人間のみに附與されたる特性である。而してこの二要素は互に他を豫想するの相即の立場に在るとの義理は、その儘機相・法徳の體感上に移行し得る。觀經の「汝是凡夫」こて命題「凡夫トハスナハチワレラナリ」との證文の語は、人間觀に於ける慚愧者の姿であるが、これこそは愛欲のうちに慈光を蒙る姿であり、凡俗中に聖心を慕ふの相である。自己反省の深さに於て、一切の罪惡を縮し以て、自己一身上に之れを痛感せる聖人は、斯る者をこそ救濟せずんば息まざる誓願なるが故に、彌陀五劫思惟の願も専ら親鸞一人が爲なりと歡喜せざるを得なかつた。更に、斯く感ずることも自己の力に依るにあらずして、自らの不完全・無力罪惡相を自意識するも亦、如來に依つて識らしめらるゝのである。

自己相に徹するは、佛に依つてのみ始めて義とせらるゝのであるが故に、斯る墮獄一定の機を救済し給ふ如來の慈悲への感謝も亦、自己の力に依るそれではなくして之れ皆佛に依つて義とせられるのである。勿論、説必次第もあるが、かの西・鎮の二種を別見し、初めに信機、後に信法を談ずるとは異り、二種の深信即一を義とする親鸞に在つては、是等、機相・法徳は如來の願海裡に止揚せられ、此の如來の智力中に於てのみ機相の深刻さは、愈々如來の攝護の切實なる體感としての法徳に徹することとなるのである。機相・法徳は、反比例の宗教形式に在りながら相互を助長せしめ合ひ、その儘何ら無理なく如來の本願に懷かれてゐる、かゝる佛一元の義理の下に、

佛の衆生への救済の態たる表象態としての名號の恩徳廣大なるを信知せしめらるゝ時、この眞實信心は必ず名號(10)を具し、稱名念佛は必然的となる。必然の儘が自然である。それは既に往生決定上の念佛なるが故に手段のそれ

ではなく、目的自體であり、只如來大悲への報恩謝徳の念佛であり、それがその儘歡佛・懺悔・莊嚴淨土の行となる。それは又引いては道德生活にも深甚なる影響を及ぼし、痛烈なる機相の罪惡意識に依る道德善の批判と、徹底せる法徳の恩意識とに依つて、無漏の善行を營むに至らしめるのである。

註(1) 大正八三卷 五九七頁中

(2) 同 六四八頁下

(3) 文意 大正八三卷 七〇〇頁下

(4) 銘文 大正八三卷 六八三頁下

(5) 和語燈錄 大正八三卷 一九〇頁下

(6) 淨土法門源流章 淨土宗全書十五 五九四頁上

(7) 銘文 大正八三卷 六七九頁中 六八三頁中下

末燈鈔 大正八三卷 七一一頁上 七一三頁下

(8) 大正八三卷 六〇七頁中

(9) 現世利益和讃 大正八三卷 六五九頁

(10) 信卷 大正八三卷 六〇六頁中

(11) 銘文 大正八三卷 六八二頁下

四、顯益としての彼土の證果

佛教の理想が涅槃に在る事は贅言の要もない。淨土教の最高發達點に位する親鸞教も亦、佛教に於ける一の流れたる以上、その理想境の涅槃界に在る可きことは當然である。而してその理想境の、彼土に望まれるのも、彼土たる極樂淨土は涅槃の積極的に展開されたるものであり、其處への往生に依る阿耨菩提の圓成の爲である。

親鸞のこの彼土初生即時成佛思想は、かの小乘佛教時代に唱道されたる無餘涅槃に、而してそれに對して此土入不退思想は有餘涅槃に、その二様の様相に於て類似してゐる。のみならずその内容の點にても、眞の意味に於ける證得涅槃の、地上現身にては望み得ぬとするのは、かの無餘涅槃と軌を一にし、未だ有漏の苦果たる此の身心ある間は、煩惱の殘餘ありとするは、かの有餘涅槃と相似してゐる。然し無餘涅槃の灰身滅智の如き消極的・

虛無的なるに對比して、親鸞の成佛の内容は、真空の儘ながらの妙有的なる點に於て、その趣きを異にしてゐると云ふべきであらう。即ち往生者の欲・有・見・無明の因の四暴流を斷除し、老・病・死の苦を隔て、因亡するが故に涅槃の洲渚を得、果滅するが故に常に淨土に居する身となつての般若の眞智の顯現は、無餘涅槃に於けるが如き我の消滅ではない。其の不滅の當體たる寂靜境は、煩惱絶滅の絶對境であり、眞如冥合の世界である。それは往生者の得る證果なるが故に彌陀のそれに一如し、光壽二無量の眞報身佛の體を得、その成佛の證の土も彌陀の眞報土である。故に末燈鈔にも「コノタヒコノ身ノオハリ候ハントキ、眞實信心ノ行者ノ心報土ニイタリサフラヒナハ、壽命無量ヲ體トシテ光明無量ノ徳用ハナレタマハサレハ、如來ノ心光ニ一味ナリ」とある。⁽¹⁾したがつて此の往生成佛の意義中には、當然佛身・佛土の問題も、尠くとも、之れを廣義に解する限り内包せらるゝもので

あるが、佛身土それ自らとしての精述は、茲に之れを略する。

次に往生成佛と佛性との關係に就いて考察せんに、如來に據る有漏業の斷除は、自性清淨なる佛性の發露でなくてはならぬ。此の佛性は元來一切衆生に於て先驗的に内存するものであり、一切衆生悉有佛性とは世尊菩提樹下に於ける宣言であるが、親鸞の煩惱無明の掩へる凡夫の立場に在つては、己が自性徹見の能力は無く、したがつて開覺佛性は望まらるべくもない。それは唯佛陀の大願力に據る淨土往生を俟つてのみ其の覆障は全除し、爰に於て始めて佛性を十分に顯現するに至るのである。それは眞佛土卷に「惑染衆生於此不能見性、所覆煩惱故、經言說十住菩薩少分見佛性、故知、到安樂佛國即必顯佛性、由本願力廻向故⁽²⁾」とあり、又行卷に「一乘者、名爲佛性、以是義故、我說一切衆生悉有佛性、一切衆生悉有一乘以無明覆故不能得見⁽³⁾」とあるを見ても諒解さる、所である。

この他、眞佛土卷⁽⁴⁾や信卷の涅槃經の引用文、及び和讃に「大信心ハ佛性ナリ、佛性スナハチ如來ナリ⁽⁶⁾」とあり、又、涅槃經の獅子吼品に依據せる文意にも「コノ心ニ誓願ヲ信樂スルカユヘニ、コノ信心スナワチ佛性ナリ⁽⁷⁾」とあるが、斯く凡夫心の反省に於ては本具佛性なりとは感ぜられずして、それは如來よりの廻向として轉化せられ、それを機に受けては大信心となり、有漏の身業と宿業との滅却時たる淨土初生を俟つてのみ、その信心即ち佛性が全現して、涅槃の證の開顯となると解せられるのである⁽⁸⁾。之は天台宗の正・了・縁の三佛性、華嚴宗の自性住・引出・至得の三佛性に類似してゐる所である。然し西・鎮諸流の如く、自己本具の佛性を彌陀佛の悲智力に據りて開顯すると爲すに對して、親鸞の佛性觀の眞意は之れと異り、佛教なるが故に、性としての自己の力を全然、認めぬのではないが、修としての彌陀の力を非常に強く觀る點に於て、その特異性が在るのである。此の彌陀に

據りて佛性の全顯せしめらるゝ處、即ち自性清淨涅槃であるが、滅度が佛性であり涅槃の境なるが故に、無因亦無果・無生亦無滅・無苦亦無樂⁽⁹⁾である。それは亦、常樂であり、畢竟寂滅であり、無上涅槃であり、又無爲法身であり、且亦實相・法性・眞如でなくてはならぬ。是等の異名中、畢竟寂滅及び實相・眞如・一如は曇鸞に、常樂・無上涅槃及び法性は善導に來由してゐるのである。

然し已に文意に於ても之を觀るが如く、無限絶對の眞理の世界の形容は、管に如上に留まるのみならず、必ずや亦無量であらう。⁽¹⁰⁾この無量の意義内容を有する涅槃の當境は、諸不純の樂を斷じ、業清淨・身清淨・心清淨の一切淨化されし相に於て在り、法性に隨順し法本に乖かず、法藏菩薩の大願・大行の因力の集積なるが故に平等一味にして、女人根缺不淨人なりとも一度往生すれば、清淨なる平等無爲法身を成就し、⁽¹¹⁾智慧高明にして神通洞達し、容色微妙・精微妙軀にして、その自性虛無之身・無極之

體は咸同じく一類にして形に異狀は無い。⁽¹²⁾品位階次を云はず一二之殊無く縑澠一味である。⁽¹³⁾然もその一味は外形的の一色光的のものではない。最もよく調和せる差別の相に於てのみ平等が期せらるゝとは、佛教哲理の示す所である。故にこの淨土の往生人は各々不一不異でなくてはならない。於茲、眞空その儘の妙有の涅槃界が奇しくも繰り擴げられる。内心救はれし者の外相であり、感覺機關の闕陋無きに寄せて內的感情に偏執無きを表現するものとしての卅二大人之相、證りの無礙妙智力を表はすものとしての六神通、衣の破綻する事無ければ裁縫の要無く、鮮明なれば搗染を須ひず、汚穢なれば洗濯の要無き衣服隨念受樂無染の徳、國中の菩薩の他方の菩薩を領會する底の隨意聞法、智慧の大海の如きを示す常宣正法・聞法供養、或は觸光柔軟・聞名得忍等の是等妙有の諸相は、その儘淨土の莊嚴となり、極樂の妙境と相即相入し、是等一切が自然虛無無極の體の現はれであり、絶對寂靜

中の逍遙なる所に、妙有それ自體、真空の深味を内示してゐる。

以上は眞實信心獲得の一因に依る一果たる報土往生者に限らるゝ事であるが、他方斯る信心の因なき者、所謂、絶對的救濟の必然とその豫約無き者に在つては、即ち、化土に往生するのである。この點諸行・念佛共に同一報土に生ずるとなす鎮西や長西等とは趣意を異にする。⁽¹⁵⁾親鸞の化土の往生者たる邪定聚・不定聚の機に在つては、正定聚の機の、正しき報土往生の蓮華中の化生なるに對して胎生であり、報土往生たる難思議往生に對して雙樹林下往生・難思往生であり、亦報土化生の即往生に對して便往生である。⁽¹⁷⁾聖人は斯る化土の胎生をば大經如來會、又は善導・源信・憬興等の思想に據り、邊地邊界・疑城胎宮・懈慢界・懈慢邊地・七寶・講堂道場樹・牢獄・胎生邊地等の語を以て表してゐる。⁽²¹⁾斯く化土の往生の果を感ずる往生者にとつては、如來・淨土等の依正一切の客

體は、總て有限化され主觀化されたる相に於て影ずることとなり、眞報身も爲に化身として影現するに至る。斯る主觀の自己限定としての假の佛土の業因の千差なるが故に、報土の一因一果に對して、果としての化土も復千差でなくてはならぬ。大經の三輩往生、觀經の九品往生は、實にこの化土の千差なる様相を顯示せるものに他ならぬ。然し顧るにこの化佛土も如來本願海中のものにして、本來眞佛報土と異なるものではない。故に眞佛土卷にも「眞假皆是酬報大悲願海」とある。⁽²⁸⁾此點かの報化二土を別の土なりと見てゐる隆寛等とは異り、親鸞に在つては本願に據る報中の垂化なのである。本願とは他なし、凡ゆる者をば悉く如來同體の證果を得せしむるにある。不果遂者の願は、緣に隨ひ感に趣いて之等化土人を開覺せしめずんば息まぬ。此の本願海裡の慈光に浴せし化土の諸人は、有量の莊嚴裡に無量の涅槃相を覩見する事に依り、更に進一步して方便化土をして眞に方便化土なり

と自覺せしめらるゝ時、その儘即時に眞實報土の展開が招來される。末燈鈔に「佛恩ノフカキコトハ、懈慢邊地ニ往生シ、疑城胎宮ニ往生スルタニモ、彌陀ノ御チカヒノナカニ、第十九第二十ノ願ノ御アハレミニテコソ、不可思議ノタノシミニアフコトニテサフラへ、佛恩ノフカキコトキハモナシ」とある。之は單に一例に過ぎないが、第十九・廿兩願の機を以て代表されたる是等化土往生人の一切は、如來大悲の恩徳に依り、その多少は問はず自力的なる一切のもの、無功なるを信知せしめらるゝ一念時に、眞の報土は眼前に展開し、滅度の證果の心證は到來するのである。

以上、往生成佛の第三綱目に就いての叙述は、親鸞證果論の最重要部分を成し、如上の三綱目は往相廻向であるが、次に、その自然的展開としての還相廻向、即ち、第四綱目たる往生即成佛後の様相に就いて考察を進め度し。

親鸞の證大涅槃觀は、大乘教義に於ける無住所涅槃の思想に相通する。即ちその涅槃は單なる過境的實在にあらずして、生死を解脱しつゝ、生死に圓融し、生死を超越しつゝ、生死に遊化し、以て攝化度化の働きを爲す。それは生死にも執せず涅槃にも定着せぬ所に在つて、而も涅槃に住してゐるのである。已に涅槃に住してゐるが故に、如來と等しからねばならぬは云ふ迄もない。故に此の還相廻向の願たる大經第廿二願の示す因位補處の還相位に到るとするならば、それは當然從果降因・利他教化地の位であり、その働きは二卷鈔にも、「……言廻向者、生彼國已、還起大悲廻入生死教化衆生、亦名廻向也」とある如く、自利圓滿せる證果の自然的悲用としての利他圓滿行でなくてはならない。往相廻向が向上的とするならば、それに對する還相廻向は向下的である。若し此の向下一門が伴はなかつたならば、正像末和讃にも「往相廻向ノ大慈ヨリ、還相廻向ノ大悲ヲウ、如來ノ廻向ナカリセ

ハ、淨土ノ菩提ハイカカセン⁽³¹⁾とあるが如く、滅度も眞の滅度たり得ない。滅度は利他教化地を展開せしむることに依つて、自ら滅度を圓滿ならしめる。斯く觀すれば還相は往相との對立的立場を失つて、往相中に攝せらるゝと解し得ると共に、還相は證果の一作用と認められる。

親鸞が證卷中の一部分として還相廻向を提示したのは、おそらくかゝる意味の下に於てであらう。文意に「コノサトリヲウレハ、スナワチ大慈大悲キワマリテ生死海ニカヘリイリテ、普賢ノ德ニ歸セシムトマウス⁽³²⁾」と述べてゐるが如く、淨土に往生する即時に於て彌陀の大慈悲に一如すれば、自己の成佛を圓滿ならしめんが爲の利他行なりとの意も無く、只、大慈悲の旺盛する餘り、よし、三惡道に流轉するとも、苦惱の衆生を救濟せずんば息まざる菩薩行となるは必然である。之れこそ成佛後の眞底でなくてはならぬ。この意味より想ひを回せば、證卷引用の論註の如く、吾人の淨土にて得證せんとすることも

自身住持の樂の爲ではなくして、一切衆生の苦を除かんが爲のそれではなくてはならない。何故ならば彼土往生成佛後にあらざれば、眞の教化は不可能なるが故である。

此の立場からすれば、逆に往相は還相に攝せられることなる。攝化度化の本願、それは全人の願ひに應ずる救はで息まぬ如來の願心である。されば普賢の願たる還相の菩薩の行願は、如來の願心の證得であり、如來の願行への參加である。而してこの榮えある行願への參入は、還相の菩薩の二智に依つて爲される。この二智とは眞如と冥合する第一義的智慧たる般若の根本智と、差別の萬象を宛然に觀する方便智とである。智慧と方便とは菩薩の父母である。若し智慧なくして衆生の爲にする時には即ち顛倒に墮し、若し方便無くして法性を觀る時には實際を證するであらう。⁽³³⁾斯く兩々相俟つて如來を背景とする生死の稠林廻入の衆生教化となり、或は諸佛國に遊ぶ供養如來の妙行となるのである。而もこの二は別行にあ

らずして、世養如來に依りて開化衆生は愈々助長せしめられる。この神通遊戯三昧行こそは、畢竟するに莊嚴淨土の妙行である。斯る還相行こそは、單なる寂靜處や快樂處にあらざる流動神通の涅槃の内容を説明して餘りなきものであり、之こそ積極的なる利他の力用を缺如せる小乗佛敎に對し、二利圓滿を高調する大乘佛敎の精華を具象的に明示するものと云ふ可きである。

- 註(1) 大正八三卷 七一六頁下
- (2) 同 六二六頁中
- (3) 同 五九八頁下
- (4) 同 六二四頁上
- (5) 同 六〇五頁上
- (6) 同 七〇二頁中
- (8) 諸經和讚 大正八三卷 六五九頁上
- (9) 信卷引用ノ涅槃經ノ文 大正八三卷 六一三頁中
- (7・10) 大正八三卷 七〇二頁中
- (11) 證卷引用ノ論註ノ文 大正八三卷 六二四頁中
- (12) 證卷引用ノ大經ノ文 大正八三卷 六一六頁中
- (13) 證卷引用ノ往生論ノ文 大正八三卷 六一六頁中

親鸞教學に於ける證果論

- (14) 之ハ彌陀信仰ノ點ハ同一ナルモ、ソノ信仰内容中ニ自力的ナルモノガ介入シテキル者ヲ謂フ、
- (15) 淨土法門源流章 淨土宗全書十五 五九九頁下―六〇〇頁中
- (16) 化身土卷頭 二卷鈔上卷 大正八三卷 六四八頁上
文類 大正八三卷 六七三頁中下―六七四頁上中
- (17) 化身土卷 大正八三卷 六二九頁中 二卷鈔下卷 大正八三卷 六五四頁上
- (18) 化身土卷 大正八三卷 六二七頁上中
- (19) 文類 大正八三卷 六七四頁下
- (20) 正像末和讚 大正八三卷 六六六頁下
- (21) 大正八三卷 六四八頁中
- (22) 末燈鈔 大正八三卷 七一一頁中
- (23) 正像末和讚 大正八三卷 六六六頁下―六六七頁上
- (24) 又ハ七寶ノ獄・七寶ノ宮殿、正像末和讚 大正八三卷 六六七頁上
- (25) 淨土和讚 大正八三卷 六五六頁下
- (26) 正像末和讚 大正八三卷 六六七頁上
- (27) 文意 大正八三卷 七〇四頁上
- (28) 淨土法門源流章 淨土宗全書十五 五九四頁下
- (29) 大正八三卷 七一二頁中
- (30) 同 六五三頁上

(31) 大正八三卷 六六六頁中

(32) 同 七〇〇頁中

(33) 證卷引用ノ論註ノ文 大正八三卷 六一九頁下

五、親鸞證果論批判と其の歸着點

以上を以て、略々四綱目の説述も終へたと思ふが、更に以下、佛教本來の立場を中心點として之れを批判し、以て、親鸞教學中の證果の將に有るべき姿態を觀じ度いと思ふ。

親鸞の眞實にして究極の證果が、彼土たる極樂世界に於てのみ期せらるゝとのことは、果して妥當の意味を有するであらうか。之には先づ指方立相に就いて検討するの要がある。若し證果の地たる彼岸界が超越的客觀的實在界であるならば、それが此土との對立を豫想すること等に依つて、亦、此土との間に十萬億土の介在すること等に依つて、絶對界の意味を喪失して相對界の意味を有す

ることなる。亦文字の如く空間的他方的世界であるならば、この穢土たる娑婆世界とは同じく空間的連鎖上に在ることに依り、嚴密なる意味に於て彼土も亦穢土たざらざるまでも穢土的たるは免れず、畢竟清淨無漏界たるの意義を失ふことゝなるのみならず、廣く日進月歩の文化科學、並に自然科學の進展途上に在る世界人智の理智的要求に満足を與ふ可く、斯る客觀的超絶的世界は、果してその存在根據を永久に保持し得るであらうか。又淨土思想が既に加上的歴史を辿り、彼土證果思想自體も七祖の深化發展を經、更に親鸞に至つて主觀的加工に依る進一歩せる發展變化の事實は、絶對界たる淨土の、既に人間の知情意の制約下に在るとの事を、それ自身に物語つてゐる所のものである。而して阿彌陀佛は無量壽を體とし、無量光を用としてゐる佛であり、而も親鸞に於ける彌陀は、特に無限の意味を有する盡十方無礙光如來なる事を銳意探究すれば、彌陀は自らその彼土的佛たる事を

失ふに至る。のみならず、當阿彌陀佛は釋尊の佛身觀の發展途上に於ける一の佛であり、それは釋尊の姿を更へての、之れを換言すれば、釋尊自内證の理念の具象化とも云ふ可きである。故に法藏比丘の兆載永劫の修行は、釋尊因位の菩薩行に關する本生譚の轉化であり、その本願成就は釋尊の成正覺より執り來れるものと解さる可きである。而してその彌陀の淨土は、釋尊の涅槃の内容を積極的に具象化し、それを構成するに天部の諸内容を借り、之と相俟つに人間本然の要請と、印度人本來の性質とを以て出來た一種の幻想的存在に他ならぬのである。又その西方と云へるは、日の沈む處なるより、人生の終歸する所へと連關せしめた事に依つたのであり、亦その西方との方向の指示も、確たる目標の決定に依る心決定への方便と解さる可きである。かの十萬億佛土の彼方なる極樂は、迷ひの世界超越の眞意にして、此土即今に他ならぬ。淨土教が一佛教中のものたる限り、如上の如き

領解は失當ではなからう。亦初めは如來も淨土も、禪觀の方便、又は對象として定立されたもので、明かに觀念的存在であつたのは、佛教々理史上争ふ可からざることである。斯く觀じ來らば、淨土の客觀的超越性は失はれ、彌陀は釋尊へと還元される。證に關する釋尊の立場は、客觀にあらずして純主觀に、彼土にあらずして現法般涅槃たるべきが故に、彌陀一元に立つ親鸞の彌陀如來が釋尊に歸せられし以上、親鸞に於ける證も亦したがつてその本來の相に還つて釋尊の立場に立つべきであらう。

爰に於て吾人は、異なる様相、云はゞ親鸞の様相に於て、即ち人間の宗教意識の一形態とも云ふ可き未來往生の要求を肯定せる儘に、現生にて佛教の究極境を體得せしむる、佛教としての親鸞教の應病與藥的巧妙性を見出さざるを得ない。然らば彼土の得證の内容は、此土上に如何に充足されてあるであらうか。

此の世に於て附與せらるゝ正定聚は、初地なるが故に

佛覺位迄の階位を残し、等覺との間には十地の隔りがあり、その修行に於ては、實に二大阿僧祇劫を要する。然し得生の因と得生の果との關係が必然的なる時には、得生の果が却つて願生の因に作用してゐるの道理にして、入正定聚者の娑婆の業緣盡きて、彼土得生即時に佛陀同等の地位が豫約されてゐる點からは、佛位に隣接せる位でなくてはならない。故に等覺金剛心の菩薩であり、初地不退と共に等覺不退とも云ふべきであらう。前者に就いては大經に「住定聚」⁽¹⁾とあり、後者に就いては如來會に「成等正覺」⁽²⁾とあるが、是等に就いて聖人は、末燈鈔に「信心ヲエタルヒトハ、カナラス正定聚ノクラキニ住スルカユヘニ、等正覺ノクラキト申ナリ、大無量壽經ニハ、攝取不捨ノ利益ニサタマルモノヲ正定聚トナツケ、無量壽如來會ニハ、等正覺ト、キタマヘリ、ソノ名コソカハリタレトモ、正定聚・等正覺ハ、ヒトツコ、ロ、ヒトツクラキナリ……淨土ノ眞實信心ノ人ハ、コノ身コソ

アサマシキ不淨造惡ノ身ナレトモコ、ロハステニ如來トヒトシケレハ、如來トヒトシトマフスコトモアルヘシトシラセタマヘ」⁽³⁾として、此の何れをも首肯し、以て正定聚・等正覺の同一なるをば闡明してゐる。等正覺に關し、聖人の言へる言葉に次如彌勒・便同彌勒、更に進一步せし諸佛等同(又は與諸如來)てふことがある。即ち、信卷⁽⁷⁾等に依れば、念佛の衆生は臨終一念に證大涅槃する點、等覺の金剛心を窮めし彌勒の、龍華三會の曉、無上覺位を極むるに相似し、何れも順次に必得作佛するが故に、此の點、信心念佛の衆生は等覺の彌勒に等しく、更には五十六億七千萬年後の彌勒の成佛の果德よりも、信心人のそれは速きこと萬々なるに於て、讚歎慶喜せる聖人の衷情が、和讚等⁽⁸⁾に旺盛してゐる。末燈鈔にも亦「彌勒ハイマタ佛ニナリタマハネトモ、コノタヒカナラス佛ニナリタマフヘキニヨリテ、彌勒ヲハステニ彌勒佛トマフシサフラフナリ、ソノ定ニ、眞實信心ヲエタルヒトヲハ如

來トヒトシトオホセラレテサフラフナリ」と云ひ、更に亦、涅槃經を依據として和讃に述ぶるが如く、不淨造惡の身ながらも、大信心體得のその心は佛性であり、佛性は如來なるが故にとのこと、又惑染の凡夫信心發すれば、生死即涅槃なりと證知せしむ等々の、是等を以て、信心人の便同彌勒なると共に、進んで等同諸佛なることが領會される。

爰に至つて、彼土にての全き證果は此土へと轉廻され來り、證の究極地は此土上に歸せらるゝことゝなる。即ち、彼土往生即時成佛は、此土聞信即時入不退位に一致し來り、此土の聞信の即時に於て成佛が圓成するに至る。斯く親鸞の證果が已に此土上に要期されし以上、彼土從果降因の還相廻向も亦、したがつて此土上へと轉廻されなくてはならぬ。元來還相廻向は往相廻向の果、即ち、淨土初生時の證大涅槃より自然に展開するものなるが故に、此の彼土上の所證が此土へとコペルニカス的轉廻を

なせる以上、此土聞信後の自然法爾行としての一切は、その儘還相廻向となる。彌陀に託乗することに於て彼土に至る相を示し、罪障の離れ難き此の世に在る限りは、唯、彼の世に生じ終りて後還來してと期せらるべきであらうも、往還二廻向は一の圓環をなし、往くことが全く自然に還ることなるに依り、願生者に執つて彼國に生じ終りて後に期せらるゝものこそは、最も深く現實を動かすものであり、何れの行も及び難き内懷虛假の身には、攝化度生の如き普賢の行願は、此の世にては到底望み且果遂され得べくもなく、不得外現賢善精進之相を知る謙虛の機相の反省は、我執を除却し、はからひを遠離するものであり、且如來の願力救済に依り今や安慰を得た身の、法悅よりの自然行としての諸行持こそは、實に、大乘眞實の菩薩行である。

斯くて、彼土にての往生即時成佛と、成佛後の様相としての還相廻向行は、夫々、此土にての聞信即時入不退

轉位と、不退轉位後の様相としての、機相・法徳の感謝・報恩の行に一致し來るに至る。茲に及んでは、問題は只、此土にての入信即時成佛と、成佛後の人生に縮少せられる。而して此の證の基點は、外ならぬ信心獲得であり、彌陀の本願の聞名信喜である。

斯く觀じ來れば、親鸞教學に於ける證の問題は、信の問題に一致するに至る。又行と謂ふも信とは別のものに非ずして、信相續の相であり、入正定聚後の人生、即ち、信心獲得即時成佛後の人生は證相續の相なるが故に、證の問題は信の問題に一致すると共に、行信の問題にも一致してくる。則ち、親鸞教學に於ける證果論と行信論とは、楯の兩面の關係に在つて、相一致の結論に到達するに至るのである。

(附記) 佛體即行説と名號即行説の中、私は後者を以て親鸞の眞の立場なりと信ずる。此の見方が當證果論にも影響してゐるのである。次に現代斯方面の諸大家のものを種々参考したるも一々擧げなかつたことも一言斷つておく。

當拙文に對し、大方諸大徳の御批判御示教を衷心乞ひ奉る。

- 註(1) 大正十二卷 二六八頁上
 (2) 淨土宗全書一、一四二頁上・一四六頁下
 (3) 大正八三卷 七一二頁中
 (4) 證文 大正八三卷 六九五頁上
 (5) 同 六九五頁中
 二卷鈔 大正八三卷 六四八頁下
 (6) 末燈鈔 大正八三卷 七一四頁上
 證文 大正八三卷 六九六頁上
 (7) 大正八三卷 六〇九頁中
 (8) 正像末和讃 大正八三卷 六六五頁中下
 (9) 大正八三卷 七一七頁中
 (10) 信卷引用 大正八三卷 六〇五頁上
 (11) 諸經和讃 大正八三卷 六五九頁上
 (12) 行卷最後ノ正信偈中ノ天親讃偈
 (13) 文意 大正八三卷 七〇四頁上